

特

集

果樹ハダニ防除における天敵利用 ニホンナシにおける防除体系

千葉県農林総合研究センター 病理昆虫研究室 清 しみず 水 けん 健

はじめに

ニホンナシ栽培において問題となる様々な害虫の中で、ハダニ類（主にナミハダニとカンザワハダニ）は特に大きな問題となる（図-1）。ハダニ類は梅雨明けころから新梢葉上で急激に増加し、多発生すると9月ころに早期落葉を引き起こす（図-2）。早期落葉は翌年の樹勢を低下させるだけでなく、本来の開花時期とは異なる秋期に開花を誘発することにより、翌年の開花が見込めなくなる枝を発生させ、収量を激減させる。ハダニ類が主に葉だけを加害する害虫だからといって軽視できないのは、このためである。

これまで、各種指導機関が提示してきたニホンナシの病害虫防除暦においては、ハダニ類に対する防除は化学合成殺ダニ剤（以下、殺ダニ剤）に大きく依存してきた。しかし、ハダニ類は新規の殺ダニ剤に対しても感受性を低下させた個体群が各地で発生し、特にナミハダニにおいてはその傾向が顕著であり、大きな問題となっている（飯塚ら，2018；三代，2021）。効果の高い薬剤は数剤に限られ、殺ダニ剤を主体とした現行の防除体系は近いうちに限界を迎える可能性がある。

一方で、近年、各種果樹においてカブリダニ類をはじめとする天敵生物の利用を取り入れた新たなハダニ防除技術が確立しつつある。園内に発生する土着天敵に加えて、果樹類（露地栽培）において天敵製剤が使用可能となり、これらの特長を併用した〈w天敵〉防除体系に期待が集まっている（農研機構果樹茶業研究部門，2020）。本稿ではこれまでの研究から明らかとなった〈w天敵〉利用技術のポイントを、ニホンナシ栽培における利用を想定しつつ、IPM（総合的病害虫管理）の観点からまとめた。ニホンナシ栽培におけるハダニ防除は、園内にハダニ類を全く発生させないことを目指すのではなく、天敵の活動を保護しつつ、ハダニ類が多発生に至らないよ



図-1 ナミハダニ（上）とカンザワハダニ（下）

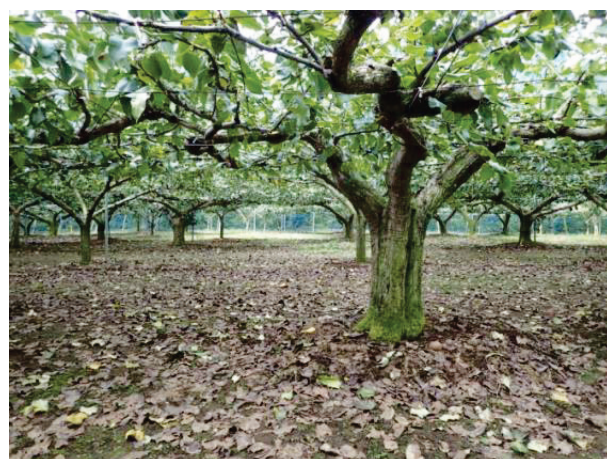


図-2 ニホンナシの早期落葉被害（2014年9月1日撮影）

Biological Control of Spider Mites on Japanese Pear from an IPM Perspective. By Ken SHIMIZU

（キーワード：ニホンナシ，土着天敵，天敵製剤，w天敵，害虫，防除）